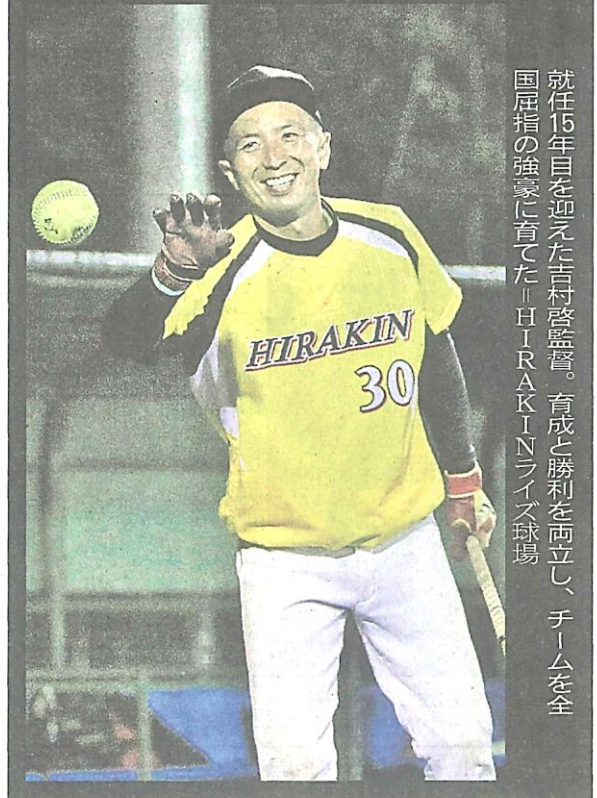


タクト

リーダーたちの指導論

④ 吉村啓監督

(ソフトボール・平林金属ク)



就任15年目を迎えた吉村啓監督。育成と勝利を両立し、チームを全国屈指の強豪に育てた「HIRAKIN」ライズ球場

選手目線育成と勝利両立

日本男子ソフトボール界は今、平林金属クを中心に回っている。数々の国内タイトルを手にし、投打の二刀流で知られる松田光(34)を筆頭に延べ10人以上の日本代表を輩出。多士済々の顔ぶれがそろつ。

「選手が個性豊かだからこそ見る方も楽しい。それぞれのカラーを生かし、最後にチームを勝たせるのが監督の仕事」。個々の能力を引き出すため、アンテナを張り巡らす。練習ではナインとともにウォーミングアップするのがルーティンだ。キャッチボールや会話を通じ、選手の心身の状態をチェックする大切な時間という。

チームとともに歩んできた。大学

卒業後の2002年、岡山国体(05年)に向けた成年男子の受け皿として誕生した平林金属クに加入。初代主将を任された。競技への情熱と社交的な性格を買われて監督(選手兼任)に就いたのは07年、30歳の時だった。

選手目線の姿勢は当時から一貫している。「練習はやられるのではなく、自主的に取り組むもの」。選手の側から新しいトレーニングの提案があれば柔軟に受け入れる。メンバーは社会人。自立した大人として接する。「自由にやらせてもらう分、必ず結果を出さう」と選手の気持ちは一つになる。松田。10年以上の付き合いになる大黒柱の信頼は厚い。

自分の考えを押しつけない。「これが

できなきゃベンチから外す」。かつて見聞きした高圧的な指導を反面教師にしている。普段は笑顔を絶やさず穏やかだが、いざ試合になると戦闘モードに。納得のいかない判定には烈火のごとく抗議することもしばしばある。

08年の日本リーグ初制覇を皮切りに国内大会で21度の頂点に輝いた。全国屈指の強豪には毎年、有望株が仲間入りし、レギュラーの座を巡る競争は激しい。そんな中、出番の少ない選手のモチベーションを保つことにも心を砕く。

先月31日の日本リーグ最終戦。大卒新人らをバッテリーに先発起用し、難敵ホンダを4-3で下した。地道に鍛錬を重ねる控え選手には必ずチャンス

よしむら・ひろし 沖縄県生まれ。小中学校時代は軟式野球に打ち込み、北谷高からソフトボールを始めた。中京大では内野手として活躍し、インカレに出場。2002年に加入した平林金属クで07年から指揮を執り、18年には初制覇した国体を含め国内4冠を達成した。日本が銀メダルを獲得した19年世界選手権はアシスタントコーチを務めた。現在、平林金属社長室スポーツ推進課長。44歳。岡山市在住。

を与えるのが吉村流だ。「育成」と「勝利」を両立し、栄冠を積み上げてきた。期待に応えた若手は自信を深め、その活躍に刺激を受けた主力が奮起し、戦力の底上げがさらに進む。この好循環が黄金期を迎えたチームを支えている。

マイナー競技の男子ソフトだが、全国大会ではヒラキンの選手のサインを求める子どもたちが増えている。「プレーも振る舞いも憧れてもらえるチームを追い求める」。創部20年目のシーズンも残りわずか。13日から始まる日本リーグ決勝トーナメントで3連覇を果たし、理想へまた一歩近づく。

(田井香菜子)

＝随時掲載